The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	東アジアにおける死の顕現化研究の現状と今後の展望：日本・中華圏の研究を中心に
Author(s)	法，卉；釘原，直樹
Citation	対人社会心理学研究．2018，18，p．189-197
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70557
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

東アジアにおける死の顕現化研究の現状と今後の展望

―日本・中華圏の研究を中心に―

法　卉(大阪大学人間科学研究科)
釘原　直樹(大阪大学人間科学研究科)

本稿では、存在脅威管理理論に基づく死の顕現化研究、特に、東アジアを対象とした研究について概観を行った。存在脅威管理理論によると、人は自分の死が顕現化されるような操作を受けると、文化的世界観の価値基準に合致する態度や行動を取るようになり、自尊感情を高揚させ、死の不安を軽減すると言われている。ただし、非欧米諸国における死の顕現化研究は少なく、研究結果に一貫性が欠けていることが指摘されている。そこで、本稿では日本や中華圏をはじめ、東アジアにおける研究文献に基づいて、1.死の顕現化の操作方法、2.文化的世界観と自尊感情の不安緩衝装置としての有効性、3.宗教の緩衝作用および、4.東アジア各国・地域別の死生観差、について検討を行った。また、概観の結果を踏まえた上で、今後、東アジアにおける、死の顕現化研究がどのような視点に基づいてなされるべきかについて展望を述べた。

キーワード：存在脅威管理理論、死の顕現化、文化的世界観、自尊感情、死生観

問題

「死」は誰もが避けられないものである。死に直面すると、人はその生存本能ゆえに存在論的恐怖(terror)を感じる。しかし、この「死」がもたらす恐怖こそが、人の考えや行動に影響を与えると考えられる。その影響を明らかにするため、Greenberg, Pyszczynski, & Solomon(1986)は存在脅威管理理論(Terror Management Theory; 以下、TMT と略す)を提唱した。TMT は個人の動機づけや、および社会・文化的価値の形成において、「死」が持つ重要性を示している。

不安緩衝装置による死の恐怖の軽減

人間はほかの動物と同様、死の脅威を感じると本能的に身を守り、身に迫る危険の回避を試みる。ただし、人は動物と異なり、高度な知能を持つゆえに、一時的危険だけではなく、自分にいつか必ずやってくる「死」の存在を意識する。この意識に潜む「死の恐怖」と対抗するため、人は知能を駆使し、共通の信念と価値体系を作り出したと言われている。TMT においては、この個人や世代を超えて存在し続ける信念体系を文化的世界観(culture worldview)と定義されている(法・釘原, 2017)。文化的世界観は生きる意義や目的を与えるものである。また、それは価値基準としても機能し、人はこの基準に基づいて日常生活での行為を評価するのである(Pyszczynski, Solomon, & Greenberg, 2015)。さらに、文化的世界観の価値基準を満たす者は、「直接的不死(literal immortality)」と「象徴的不死(symbolic immortality)」の達成が期待できるとされる(脇本, 2005)。「直接的不死」とは、死後にも物理的に存在し続けることを指している。往生や輪廻転生など、さまざまな形で死後の世界の存在を想定している宗教は、人々に「直接的不死」を約束する典型的な例である。一方、「象徴的不死」とは、自分の象徴物の存続を指している。この種の象徴物として、金銭や絵、作品といった有形物のほか、記憶や歴史、思想などの無形物も挙げられる(Solomon, Greenberg, & Pyszczynski, 1997)。これらの象徴物を後世に残すことにより、人は自分がいなくなった後にも、社会に影響を与え続けることを感じることができる。

上述のように、人が「不死」を実現するためには、当該の文化的世界観に忠実に従うことが要求される。文化的世界観の価値基準を満たすことにより、人は他人から高く評価されることを期待し、自分が「意味ある世界における有能な構成員である」という、自尊感情(self-esteem)を獲得することができる(Pyszczynski et al., 2015)。こうすることで、人は自分の存在を肯定的に捉え、「死」がもたらす恐怖を緩和すると考えられる。

このように、TMT では、文化的世界観と自尊感情が、存在論的恐怖を抑制する「不安緩衝装置」として働くことを仮定している(Solomon et al., 1997)。ただし、国や文化の違いによって、価値観は多様であり、物事を判断する基準も異なるため、人は自分の存在意義と価値を客観的に判断することは非常に難しい。そのため、死の脅威が高まると、人は自分と同じ文化的世界観を持つ内集団成員に、存在価値と意義の確認を求める傾向が強くなるとされている(Pyszczynski et al., 2015)。

以上を踏まえ、死の顕現化仮説(mortality salience hypothesis)が提唱されている。この仮説によれば、死の脅威が高まると、不安緩衝装置への欲求が強まると同時に、不安緩衝装置の防衛動機も触発されることが

想定されている(Pyszczynski et al., 2015)。つまり、死の脅威が高まると、人は当該の文化的世界観に合致した行動を積極的に行うことが確認されている。例えば、人は死が顕現化されると、寄付のような利他的行動をする傾向が強くなる(e.g. Hirschberger, Ein-Dor, & Almakias, 2008; Jonas, Greenberg, & Pyszcynski, 2002)。この例では、寄付行動を通して、人は周りから高く評価され、自尊感情と親和欲求を満たすことができる。一方で、死の顕現化が異なる文化的世界観を持つ者に対する偏見や攻撃行動に繋がることも示されている(e.g. Castano, Yzerbyt, Paladino, & Sacchi, 2002; 向井, 2003; 沼崎, 2010)。

文化的要因が死の顕現化効果に与える影響

Pyszczynski et al.(2015)によると、TMT は今まで 25 ヵ国で検討され、死の顕現化効果が文化を超えて存在していることが示されている。ただし、その研究の多くは欧米で行なわれており、それ以外の地域における研究は少ない。その数少ない研究を概観して、Martin & van den Bos(2014)は非欧米諸国において、死の顕現化の効果に一貫性が欠けていることを指摘している。さらに、Yen & Cheng(2010)が台湾で行った研究では、死の顕現化の効果はまったくみられなかったと報告している。これらのことから、Pyszczynski et al.(2015)は非欧米諸国において、死の顕現化効果および死の顕現化仮説の妥当性について、さらなる検討が必要であることを指摘している。また、Pyszczynski et al.(2015)は文化的要因が死の顕現化研究に与える影響の可能性に関して、以下のように述べている。

まず、文化的世界観の違いにより、死の恐怖に対処する方略、つまり不安緩衝装置の働きに違いが生じる可能性が考えられる。例えば、Kashima, Halloran, Yuki, & Kashima(2004)が国際比較研究を行った結果、日本人参加者は死の顕現化によって個人主義的な行動に対する評価が下がる一方、オーストラリア人参加者ではその行動に対する評価が上がることが明らかになっている。また、TMT では一般に、人が死の恐怖を感じると、自分の存在価値を確認するため、自尊感情を高揚させることが予測されている。しかし、日本では「謙遜は美徳」という諺がみられるように、他者との良好な関係を構築することが重視されているため、自分より他人の価値を高く評価する傾向がある。したがって、日本人参加者は死の顕現化後、自己卑下や自尊感情の低下が起こることが報告されている(脇本, 2005)。このように、死の顕現化後、人は各自が持つ文化的世界観に沿って行動することから、死に対して恐怖を感じることは共通でありながら、その恐怖への対処法は文化の価値基準によって異なってくることが考えられる。

次に、Pyszczynski et al.(2015)は、宗教・死生観の影響により、死に対する不安を低く感じる文化が存在する可能性を指摘している。例えば、Yen & Cheng(2010)は、仏教の影響を受け、多くの東洋人は生と死が対立的なものではなく、共存しているものと受け取っているため、死に対する不安を低く感じる可能性があると主張している。そのため、西洋に比べ、東アジアにおける死の顕現化効果は低いことが考えられる。また、Pyszczynski et al.(2015)の研究では、45 分間座禅をした韓国人参加者はその後に行われた実験で、韓国を批判する人に対してより寛容な態度を示したことが明らかになっている。このことから、宗教意識と行動はある程度死の恐怖を抑制し、死の顕現化効果を低下させる傾向があると考えられる。

以上、Pyszczynski et al.(2015)の主張を踏まえれば、文化的要因が「死」の恐怖を抑制する不安緩衝装置の働きとその有効性に影響を及ぼしていることが考えられる。そのため、東アジアにおける死の顕現化研究を整理することにより、TMT における普遍性と特殊性に関して新たな知見を加えることが可能であろう。

さらに、Kashima et al.(2004)は、死の顕現化操作の方法とその有効性が、文化によって異なる可能性があると主張している。従来の研究では、死の顕現化を操作するため、参加者に大切な他者の死を考えさせることや、流血描写のあるビデオを見せることなど、多くの方法を試みてきた(Greenberg, Pyszcynski, Solomon, Simon, & Breus, 1994)。その中で、最も有効的であるとされているのは、自分自身の死、つまり、個人的死を想起させる方法である。しかし、Kashima et al.(2004)は、欧米に比べ集団的アイデンティティーを重視し、集団主義的な文化背景を持つ東アジアの国では、個人的死よりも集団的死について想起させるほうが、死の顕現化効果が顕著である可能性があると述べている。その可能性を検証するため、死の顕現化を操作する方法について、東アジアの研究を含めた過去の研究を概観することは意義があると考える。

目的

以上を踏まえて、本稿では日本・中華圏(本稿において、中国大陸・香港・マカオ・台湾を中華圏と定義する)を中心に、東アジアにおける死の顕現化研究について、以下の 3 点から概観を行う。第 1 に、死の顕現化の操作方法を確認する。第 2 に、東アジアにおける死の顕現化効果を確認する。また、これを踏まえて、文化的世界観と自尊感情は有効的な不安緩衝装置として、「死」がもたらす恐怖を抑制することができたのかにつ

いて検討する。第 3 に、研究論文の中で、東アジアの各国(地域)における宗教・死生観について言及する部分を概観し、それぞれの共通点と相違点を見出すことを試みる。

以上の概観を行った上で、今後、日本・中華圏をはじめとする東アジアにおける死の顕現化研究がどのような視点に基づいてなされるべきかについて展望を試みる。

方法

日本・中華圏を中心に、東アジアにおける死の顕現化研究を概観するために、本稿では Google 社が提供する検索データベース [1](Google Scholar)、日本の学術論文データベース [2](CiNii Articles)および中国の学術論文データベース [3](Cnki 中国知網)を使用し、先行研究を以下のような制約を設けた上で、先行研究の検索を実施した。

まず、本稿において、研究論文の発行年を 2007 年から 2017 年までに設定して検索を行った。また、可能な限り研究論文のみを検索の対象とするために、本稿では英語・日本語・中国語の学術雑誌に掲載された査読付き研究論文のみを検索の対象にした。なお、検索に際して使用したキーワードは“死の顕現化” or “存在脅威管理理論”and“日本”or“中国”or“香港”or“マカオ”or“台湾”or“東アジア”とした [4]。

上述の方法によって得られた研究論文の内容についてそれぞれ確認を行った。まず、抄録(supplement)や要約(abstract)のみの検索結果については検索件数から除外した。次に研究論文の内容について確認を行い、明らかに死の顕現化研究と関連していないものについて、検索結果から除外した。最後に、各検索結果に研究論文の重複がみられないか確認を行った。重複がみられた場合、研究論文の総件数を求めるときに重複を除いた件数を表示した。以上の方法によって得られた各国・地域の研究論文の件数をTable1にまとめた。なお、本稿における研究論文の検索件数は 2017 年 12 月における件数であった。

Table 1 本稿における研究論文の件数

国・地域 / 言語	日本	中華圏		
		中国大陸	香港	台湾
英語	3	8	5	2
日本語	9	-	-	-
中国語	-	15	-	-
合計	12	23	5	2

結果

検索方法にしたがって研究論文を確認した結果、合計 42 件の研究論文が検索された。各概念別の研究件数はTable2に示した通りである。この検索結果より、概観を行った。

1. 死の顕現化の操作方法に関する検討

死の顕現化の操作を行った実証研究の概観より、具体的な方法とその効果について分析することができ、結果は以下 2 点に集約された。

第 1 に、死の脅威を高める方法として、質問紙法と自由記述法が最も用いられていることが示された。質問紙法とは、参加者に死に関する質問紙(例:「死んだ後今までの自分がどうなるのか不安だ」、「死ぬことを考えて悩んだりはしない」)に回答させることによって死を想起させる方法である(脇本, 2009)。日本ではこの方法が主流となり、8 件の実証研究のうち、7 件が質問紙法を使って死の顕現化操作を行っていた。一方、自由記述法とは、死の顕現化研究の中で最も使用されている方法であり、参加者に自分が死ぬ時の精神的・身体的状態について記述させことによって死を想起させる方法である [5]。中華圏では自由記述法が主流となり、17 件の実証研究のうち、11 件はこの方法を用いたものであった。また、質問紙法と自由記述法以外にも、ビデオ映像による操作方法もみられている。具体的には、交通事故の映像(Xie & Yan, 2016)や地震を題材とした映画の一場面(Weng, Zhang, & Song, 2010, 2014)を参加者に見せることは有効的な死の顕現化操作として報告されている。ただし、映像の長さに関しては統一的基準が示されていない。そのほか、死に関連する単語完成課題によるプライミング法(Zhou, Liu, Chen, & Yu, 2008)と閾下プライミング法(Yen & Cheng, 2010)による操作も挙げられる。以上を踏まえて、東アジアにおいても、欧米と同様に個人的死について想起させるという操作方法が主流であることが言えるだろう。一方で、震災場面の提示のような集団的死を想起させる操作方法もみられた。ただし、死の顕現化効果を個人と集団の死の顕現化操作の観点から比較した研究がなかったため、東アジアにおいてどちらの操作がより効果的であるのかを検討することはできない。この点を明らかにするため、今後さらなる研究が必要であると考えられる。

第 2 に、実際に起こった震災などの事件が死の脅威を高め、死の顕現化効果を引き出す可能性が示唆された。Landau et al.(2004)によると、テロや震災などの発生直後には、死の思考が活性化され、個人の態度や行動に影響を及ぼすと主張している。本稿における概観の結果により、その主張を概ね支持する結果が

Table 2 本稿における研究論文の詳細(件数)

	実証研究		文献レビュー		合計
	死の顕現化操作あり	死の顕現化操作なし*	TMTを中心に	宗教・死生観を中心に	
日本	8	2	-	2	12
中華圏	17	2	9	2	30

*死の顕現化操作なしの実証研究は、死の不安に影響を与える要因を検討する調査となっている。

得られた。2008 年 5 月に発生した中国四川大地震の一ヶ月後に行われた調査の結果、被災地住民は非被災地住民に比べ、利他性が高まり、独裁者ゲームにおいて他者により多くの資源を分配したことがみられている(Rao et al., 2011)。また、東日本大震災(橋本, 2012)から一ヶ月後に行った調査の結果、震災経験によって参加者は日本人らしさへのステレオタイプ得点が震災前に比べ高まったことが明らかになっている。これらのことより、事故や災害などの事件の直後、人は自身の経験やメディアの報道によって、死の顕現化状態に晒され、文化的世界観にしたがって行動する傾向が高まることが言える。よって、今後は現実場面への応用を考えながら、死の顕現化研究を進めることが必要であろう。

2. 死の顕現化効果および不安緩衝装置の有効性に関する検討

東アジアにおける死の顕現化に関する実証研究を概観することにより、死の顕現化効果、および不安緩衝装置が死の恐怖を抑制するための具体的な働きついて、検討を行った。Pyszczynski et al.(2015)は、死の顕現化効果は文化を超えて普遍的に存在するものであり、東アジアにおいても確認されていると主張している。本稿における研究論文を概観することにより、その主張を概ね支持するような結果が得られた。死の顕現化後、人は当該の文化的世界観を防衛するような態度と行動をとる傾向が多く確認された。しかし、2 つの例外が報告されている。まず、Yen & Cheng(2010)は台湾人参加者が死の顕現化操作を受けても、内集団を批判する者に対する攻撃傾向の高まりがまったく示されないことを報告している。また、Xiao, He, & Zhu(2017)が中国人を対象として行った研究では、文化的世界観において高く評価される利他的行動(寄付・臓器提供)は死の顕現化操作によって促進されなかったという結果が得られている。これらの研究において、死の顕現化効果がみられなかった理由として、東アジアにおける宗教・死生観の影響が挙げられている。この点については後で詳しく述べる。

次に、死がもたらす恐怖を抑制するため不安緩衝装置の働きについて検討を行った。死の顕現化仮説によれば、死の脅威が高まると、人は文化的世界観の価値基準に従って行動する傾向が強まり、自尊感情、および他者との親和欲求が高まることが予測されている(Pyszczynski et al. 2015)。よって、以下ではその3つの面から分析を行った。

文化的世界観への防衛行動 TMT によると、人は死の顕現化操作を受けることによって生きることに意味を得ようとするため、当該の文化的世界観を支持し、その価値基準に合致した行動を積極的に行うことが予測されている。本稿においては、その予測を支持するような結果が得られた。結果は以下の 2 点である。

第1に、TMTの予測通り、文化的世界観への防衛行動は、死の顕現化操作によって生起させられる。Tam, Chiu, & Lau(2007) の研究では、香港人参加者は死の顕現化操作を受けることにより、深セン(中国大陸)の住民よりも香港・マカオの住民に多くの就職機会を分配し、内集団ひいきが起こるという結果が明らかになっている。一方で、死の顕現化は人が各文化における独特性のある価値基準に対して、支持的な態度をより強く示す傾向もみられている。例えば、死の顕現化は「男は仕事、女は家庭」のような日本における伝統的性役割への支持を促進し、性別による偏見に結びつくことが示された(野寺・唐沢・沼崎・高林, 2007; 沼崎, 2010)。Du & Jonas(2015, Study1)の研究では、「謙遜は社会規範である」とプライミングされた参加者は死の顕現化後、自己評価の低下がみられた。これはプライミングの規範に従ったためであると考えられる。また、Yen(2013)の研究によると、参加者は死の顕現化後、宿命論(fatalism)やカルマといった東アジア独特な死生観に対する信念が強まったことも報告されている。

第 2 に、不安緩衝装置の働き方は個人特性によって異なることが示唆されている。例えば、見た目を重視する参加者において、死の顕現化操作を受けると、社会が求める美意識に近づこうとするため、整形手術を受けることに対してより肯定的な態度を示すことがみられている(Tam, 2013)。また、物質主義傾向の強い参加者において、死の顕現化後、物欲を追求する傾向が高まるという結果が得られている(Weng et al., 2010)。これらのことから、個人が持つ内的信念は死の恐怖に対処する資源となり、不安緩衝装置の働き方に影響を与えることが考えられる。

自尊感情の高揚　死の脅威が高まると、人は自尊感情を高めることによって、自分の存在価値を確認し、死の不安を緩和することが言われている(Pyszczynski et al. 2015)。また、TMT において、自尊感情は「文化的世界観がその緩衝効果を発揮する主要なメカニズム」という位置付けがされている (e.g. Greenberg, Solomon, & Pyszczynski, 1997; 脇本, 2005)。欧米で行われた研究では、自尊感情の高い者に比べ、自尊感情の低い者は死の顕現化後、より強い防衛反応を生じ、自己高揚をすることによって不安を軽減することが明らかになっている(e.g. Harmon et al., 1997)。

しかしその一方、東アジアの先行研究において、自尊感情に関する死の顕現化仮説が十分に検討されていないため、脇本(2005)は自尊感情が効果的な不安緩衝装置として働くことについて、疑問を呈している。具体的に以下の 2 点が挙げられる。第 1 に、自己高揚は、自分の有能さを示すという欧米の文化的世界観の基準に適合した行動であると考えられる。そのため、死を考えた後に自己高揚が観測されたとしても、それは自尊感情を満たすための行動であるとは断定できない。小林・清田・北村(2014)の実験では、この見解を支持するような結果が得られた。死の顕現化後、参加者において自尊感情を高めることは確認されなかった。一方、参加者は他者とより積極的に交流することにより、親和欲求を満たすことで死の不安を緩和したことが示されている。第 2 に、東アジアにおいては、自己高揚は自尊感情を獲得する方略として、効果的ではない可能性がある。例えば、日本をはじめ東アジア各国においては、調和的対人関係が重視されているため、自己卑下を示したり、他者を自己より肯定的に評価したりすることによって、自尊感情の獲得を試みていると考えられる。

以上、本稿では自尊感情を扱う研究文献を検討したが、その数が少ないため、自尊感情の不安緩衝効果に関する普遍性のある結果が得られたとは言えない。

他者との親和欲求　最近の TMT 研究においては、死がもたらす恐怖を緩衝する機能をもつものとして、他者との関係が挙げられてきた(e.g. 小林他, 2014; Pyszczynski et al. 2015)。これまでの研究では、人は恋人や親友、内集団成員に対するコミットメントを高めることにより、集団への所属感が高まり、死がもたらす不安を緩和することができるとが明らかになっている(e.g. Florian, Mikulincer, & Hirschberger, 2002; Wakimoto, 2006)。本稿における研究文献を概観した結果は、先行研究と一致するものであり、他者との親和欲求を満たすことは死の不安を緩和する効果を持つことが再確認された。

小林他(2014)の研究では、死の顕現化後、初対面の異性に対しても交流の積極性が高まることが明らかになった。また、脇本(2009)の研究では、死の顕現化操作により自己卑下的帰属が強まると、親友からの支援的な帰属期待も強まることが示された。

さらに、死の脅威が高まると、人は社会や国といった集団への所属感を求める傾向も高まることが、Liu, Wang, & He(2014)の中国人大学生を対象とした実験によって明らかにされている。近年、中国は物質主義の影響を受け、海外製の商品に高い価値があるという考えがあるにもかかわらず、死の顕現化操作を受けた参加者は海外製の商品よりも、国産商品を好む傾向がみられている(Study1)。しかし、その傾向は、選考を行う前に、参加者に親しい他者との関係性について想起させることによってみられなくなることが明らかになっている(Study2)。Liu et al.(2014)はこれらの結果に関して、参加者は死の顕現化後、高まった親和欲求を満たすため、集団への所属感を求め、国産商品を選択したと述べている。

3. 宗教の緩衝作用および東アジア各国・地域別の死生観差に関する検討

人は死後の不確実性を感じ、死に対する恐怖が高まる。そこで、宗教と死生観は「死後の世界」のあり方を想定することによって、人に「不死」の実現可能性を提供ことが考えられる。このように、宗教と死生観の存在は死の恐怖の抑制に大きな影響を及ぼしていると考えられるが、死の顕現化研究における検討はまだ少ない。本稿では、東アジアにおける研究文献を概観することにより、宗教と死生観に着目して整理を行った。

宗教の緩衝作用について　TMT の枠組みにおいて、宗教は、死の恐怖に対する緩衝として捉えられている。なぜならば、宗教は生きることに意味を与え、道徳的な規範を通じて秩序のある世界を成立させることで、「象徴的不死」の実現可能性を提供するのみならず、天国や来世に関する教えにより不死まで約束するためである (Muslin, 2010)。

しかし、これまでの実証研究において、宗教が死の不安を和らげる効果に関して、一貫性のある結果は得られなかった(Muslin, 2009)。すなわち、死に対する不安が宗教信仰を持つことによって、軽減されることは確認できていない。その理由として、信仰の内容により、宗教は死の不安を煽る可能性もあることが挙げられる(例えば：地獄や怨霊の存在など)。また、Muslin(2010)は、死の不安においても、死にゆく過程に対する不安や、死そのものへの不安といったさまざまな側面が存在することを指摘している。これらのことによって、宗教は具体的にどのようなプロセスを経て、

死の不安を緩衝しているのかについて、今後の研究において、より具体性を持って検討する必要があると考えられる。

東アジアのおける死生観の共通点と相違点について 死生観とは、生と死に対する考え方であり、生き方や死に方についての考え方や価値と定義されている(石田・石田・神田, 2007)。また、死生観は日常生活におけるさまざまな経験や、文化的背景によって規定されている(富塚・藤, 2017)。したがって、文化や生活環境は個人の死生観の構築に大きな影響を与えることが考えられる。本稿では研究文献を概観することにより、東アジア各国・地域における死生観の共通点と相違点について検討を行った。

まず、共通点として以下の 2 点が挙げられる。第 1 に、東アジアにおいて、「死」は終点(terminal point)ではなく、過渡期(transition)であるという認識を持つことが挙げられる(Kawano, 2010)。西洋においては、「死」と「生」は一直線上にあるという考え方がある。つまり、人の死後に、霊魂は天国か地獄を生きることが想定されている。それに対して、東アジアにおいては仏教の影響を受け、「輪廻」思想に近い死生観が見られている。すなわち、人は死してあの世に行っても、違う形に変わり、またこの世に戻ることが想定されている(e.g. Leng & Salzman, 2016; Weng et al., 2010)。第 2 に、集団主義的文化背景を持つ特徴として、「生きる」ことよりも道徳的価値の実現のほうが重要であることが挙げられている(Weng et al., 2010)。儒教の経典である『論語』の中に「殺身成仁」という言葉がある。それは「身を殺して仁をなす」ということを意味している。その影響を受け、日本の武士道においても、自分の職責を果たすために常に「捨身」の覚悟をすることが重要視されているのである。このように、西洋に比べ、東アジアでは道徳や集団といった抽象的で、個人を超越した存在のために命を犠牲する行為に対して、非常に高い評価をすることが考えられる。これらの共通点により、東アジアは西洋に比べ、死をより受け入れる姿勢を示していることが言えるだろう。また、Christine & Blascovich(2012)の研究では、東洋人は西洋人に比べ、自分の死と向き合うというより積極的な態度を示したことが明らかになっている。このように、宗教観と文化の影響によって、東アジアにおいて死の不安を感じる程度はより低い可能性が示唆されている。

次に、東アジア各国・地域における死生観の相違点について議論する。日本においては、普段の生活の中でも死を意識しやすい、独特な環境であることが挙げられる(富塚・藤, 2017)。丸山(2000)の調査によれば、日本人の 7 割以上が、墓参りに出かけることを習慣にしていることが明らかになっている。また、富塚・藤(2017)は日本においては、普段から仏壇や墓前に手を合わせることにより、死という概念に日常的に触れ合っている可能性があると指摘している。こうした習慣や経験が日本人の死生観に影響を及ぼしており、死と向き合うという積極的な態度形成を促進することが考えられる。一方で、中華圏においては、死は非日常的なものとみられ、死について議論することは不幸を招くという信念(Chinese death belief)を有している人も数多く存在する。Wong(2012)が香港において行った調査では、死の不安は、迷信(superstitions)と Chinese death belief を信じる程度に正の相関がみられていることを報告している。つまり、中華圏においては、死を不吉なものだと見なし、死に対して回避的な態度を示す傾向が高いことが考えられる。また、台湾においては、「世の中の出来事は全て、あらかじめそうなるように定められていて、人間の努力ではそれを変更することができない」という宿命論的な考えは普遍的であると言われている(Yen, 2013)。Yen & Chen(2010)はこのような考えが死の不安を抑制する機能があり、台湾における死の顕現化効果が低下する原因として考えられると述べている。上述のように、東アジアにおいても、国や地域によって生と死に対する考え方に大きな差が存在することが明らかになっている。

考察

本稿では主に日本・中華圏を中心に、東アジアにおける死の顕現化研究について異なる 3 つの視点から概観を行ってきた。以下、各々の視点について今後の展望を示す。

まず、死の顕現化を操作する方法について検討を行った。その結果、東アジアにおいても欧米と同様に、自由記述法と質問紙法によって自分自身の死、つまり個人的死について想起させる操作は効果的であり、妥当であることが明らかになっている。また、現実場面に起こったテロや震災なども死の脅威を高め、死の顕現化効果を引き出す可能性もみられている。しかし、そうした現実場面での事件を想定した場合には、個人的死よりも集団的死について想起させることが考えられ、集団主義的文化背景を持つ東洋人により大きな不安を与える可能性が考えられる(Kashima et al., 2004)。今後の研究ではその可能性について、死の顕現化効果を個人と集団の死の顕現化操作の観点から比較して確認することが必要であろう。

次に、死の顕現化効果、および TMT が仮定している不安緩衝装置の有効性について検討を行った。研究文献を概観した結果、東アジアにおいて、人は死の顕

現化後、文化的世界観に合致した態度や行動を取る傾向があることが明らかになり、死の顕現化効果の存在が概ね検証された。続いて死の恐怖を抑制する不安緩衝装置の具体的な働きについて注目した。死の脅威が高まると、当該の文化的世界観への防衛と、他人との親和欲求の高揚が不安を軽減するために、効果的な機能を持つことが示されている。しかしその一方、研究文献の数が少ないため、東アジアにおける自尊感情の高揚が持つ不安緩衝機能については、まだ疑問が残されている。今後この点について明らかにするため、さらなる検討が必要であろう。

また、本稿における研究文献を分析した結果から、死の恐怖に直面する時、不安緩衝装置がどのように機能するのかは、個人の内的要因や文化的要因によって決められる可能性が示唆されている。例えば、欧米に比べ、東アジアにおいては自己の価値を認めるよりは、他者との良好な関係を構築する事が重視されることが挙げられる。そのため、死の脅威が高まると、自己高揚よりも他者との関係性を確認することで死の不安に対処することが考えられる(小林他, 2014)。したがって、今後の研究においては、不安緩衝装置を作動させる優先順位が存在するか否かを探ることにより、TMT における死の不安に対処する心のメカニズムをより深く理解することが可能になるであろう。

最後に、本稿は宗教の緩衝機能と東アジアの各国・地域における死生観の共通点と相違点についてまとめた。まず、宗教の緩衝機能は死の顕現化研究を進める上で重要な意義を持っているにもかかわらず、従来の研究において具体性を持つ検討は少ない。そのため、宗教が死の不安を緩和するプロセスについてはまだ解明されていない。この点を踏まえ、今後は実証研究を行い、宗教の持つ緩衝機能を詳しく検討することが必要であろう。次に、東アジアにおける死生観について分析を行った。その結果は以下に 2 点に集約された。第 1 に、欧米に比べ、東アジアは仏教的思想と集団主義的文化背景の影響により、死をより受け入れる態度を示し、不安を比較的低く感じる可能性が示唆されている。このことは東アジアにおける死の顕現化効果の低下に繋がる可能性が考えられる(Yen & Chen, 2010)。そのため、今後、欧米と東アジアにおける比較研究をすることにより、死生観が死の不安に与える影響について検討することが必要であろう。第 2 に、東アジアにおいても、国や地域によって死に対する態度に大きな違いがみられている。そのため、今後、各国・地域の死生観に注目し測定をすることによって、死の不安を抑制する有効な生活習慣や経験を特定できる可能性が考えられる。

引用文献

Castano, E., Yzerbyt, V., Paladino, M., & Sacchi, S. (2002). I belong, therefore, I exist: Ingroup identification, ingroup entitativity, and ingroup bias. *Personality and Social Psychology Bulletin, 28,* 135-143.

Christine, M., & Blascovich, J. (2012). Enjoying life in the face of death: East-west differences in responses to mortality salience. *Journal of Personality and Social Psychology, 103,* 773-786.

Du, H., & Jonas, E. (2015). Being modest makes you feel bad: Effects of the modest norm and mortality salience on self-esteem in a collectivistic culture. *Personality and Social Psychology. 56,* 86-98.

Florian, V., Mikulincer, M., & Hirschberger, G. (2002). The anxiety-buffering function of close relationships: Evidence that relationship commitment acts as a terror management mechanism. *Journal of Personality and Social Psychology, 82,* 527-542.

Greenberg, J., Pyszczynski, T., & Solomon, S. (1986). The causes and consequences of a need for self-esteem: A terror management theory. In R. F. Baumeister (Ed.), *Public self and private self* (pp. 189-212). New York: Springer.

Greenberg, J., Pyszczynski, T., Solomon, S., Simon, L., & Breus, M. (1994). Role of consciousness and the accessibility of death-related thoughts in mortality salience effects. *Journal of Personality and Social Psychology, 67,* 627-637.

Greenberg, J., Solomon, S., & Pyszczynski, T. (1997). Terror management theory of self-esteem and social behavior: Empirical assessments and conceptual refinements. *Advances in Experimental Social Psychology, 29,* 61-139.

Harmon-Jones, E., Simon, L., Greenberg, J., Pyszczynski, T., Solomon, S., & McGregor, H. (1997). Terror management theory and self-esteem: Evidence that increased self-esteem reduces mortality saliences effects. *Journal of Personality and Social Psychology, 72,* 24-36.

橋本 剛 (2012). 東日本大震災における非被災地住民のメディア利用と震災関連行動の関連 人文論集, *62*(2), 35-62.

Hirschberger, G., Ein-Dor, T., & Almakias, S. (2008). The self-protective altruist: Terror management and the ambivalent nature of prosocial behavior. *Personality Social Psychology Bull, 34,* 666-678.

法 卉・釘原 直樹 (2017). 世界の終末に善人が消えるのか？存在脅威管理理論からみた利他的行動への意思決定 信学技報, *117*(270), 15-19.

石田 順子・石田 和子・神田 清子 (2007). 看護学生の死生観に関する研究 桐生短期大学紀要, *18*, 109-114.

Jonas, E., Schimel, J., Greenberg, J., & Pyszczynski, T. (2002). The Scrooge Effect: Evidence that mortality salience increases prosocial attitudes and behavior. *Personality and Social Psychology Bulletin, 28,* 1342-1353.

Kashima, E. S., Halloran, M., Yuki, M., & Kashima, Y.

(2004). The effects of personal and collective mortality salience on individualism: Comparing Australians and Japanese with higher and lower self-esteem. *Journal of Experimental Social Psychology, 40,* 384-392.

Kawano, S. (2010). A sociocultural analysis of death anxiety among older Japanese urbanites in a citizens' movement. *Omega, 62*(4), 369-386.

小林 麻衣・清田 尚行・北村・英哉 (2014). 存在論的恐怖が初対面の異性に対する関係希求反応に及ぼす影響:肉食・草食動物プライミングを加えた検討 東洋大学大学院紀要, *50,* 55-69.

Landau, M., Solomon, S., Greenberg, J., Cohen, F., Pyszczynski, T., Arndt, J., Miller, C., Ogilvie, D., & Cook, A. (2004) Deliver us from evil: The effects of mortality salience and reminders of 9/11 on support for President George W. Bush. *Personality and Social Psychology Bulletin, 30,* 1136-1150.

Leng, L., & Salzman, M. (2016). The renaissance of Confucianism in contemporary China from the perspective of Terror Management Theory. *Sociology and Anthropology, 4(2),* 52-58.

Liu, W., Wang, H., & He, L. (2014). When one is dying, will he/she buy domestic products? Exploring whether, why and when the exposure to death-related information will increase domestic brand choices. 心理学报, *46,* 1748-1759.

丸山 久美子 (2000). 死生観の心理学的考察 聖学院大学論叢, *16,* 189-218.

Martin, L. L., & van den Bos, K. (2014). Beyond terror: Towards a paradigm shift in the study of threat and culture. *European Review of Social Psychology, 25,* 32-70.

向井 有理子 (2003). 異文化の拒絶と受容―恐怖管理理論の観点から― 都市文化研究, *1,* 50-65.

Musulin, I. (2009). 恐怖管理理論における死と宗教:宗教は死の不安の緩衝なのか 死生学研究, *15,* 37-56.

Musulin, I. (2010). 近年の心理学理論における死と宗教:恐怖管理理論の批判的考察 東京大学宗教学年報, *27,* 87-102.

沼崎 誠 (2010). 死すべき運命の顕現化が日本人男子大学生の性役割的偏見に及ぼす効果 東京都立大学人文学報, *425,* 15-30.

野寺 綾・唐沢 かおり・沼崎 誠・高林 久美子 (2007). 恐怖管理理論に基づく性役割ステレオタイプ活性の促進要因の検討 社会心理学研究, *23,* 195-201.

Pyszczynski, T., Solomon, S., & Greenberg, J. (2015). Thirty years of Terror Management Theory: From genesis to revelation. *Advances in Experimental Social Psychology, 52,* 1-70.

Tam, K. (2013). Existential motive underlying cosmetic surgery: A terror management analysis. *Journal of Applied Social Psychology, 43,* 947-955.

Tam, K., Chiu, C., & Lau, I., Y. (2007). Terror management among Chinese: Worldview defence and intergroup bias in resource allocation. *Asian Journal of Social Psychology, 10,* 93-102.

富塚 澄江・藤 桂 (2017). 死に対する恐怖および回避が健康行動に及ぼす影響 心理学研究, *88,* 327-336.

Rao, L. L., Han, R., Ren, X. P., Bai, X. W., Zheng, R., Liu, H., Wang, Z.J., Li, J. Z., Zhang, K., & Li, S. (2011). Disadvantage and prosocial behavior: the effects of the Wenchuan earthquake. *Evolution and Human Behavior, 32(1),* 63-69.

Solomon, S., Greenberg, J., & Pyszczynski, T. (1997). A terror management theory of social behavior: The psychological functions of self-esteem and cultural worldviews. *Advances in Experimental Social Psychology, 24,* 91-159.

脇本 竜太郎 (2005). 存在脅威管理理論の足跡と展望――文化内差・文化間差を組み込んだ包括的理論化に向けて―― 実験社会心理学研究, *44,* 165-179.

Wakimoto, R. (2006). Mortality salience effects on modesty and relative self-effacement. *Asian Journal of Social Psychology, 9,* 176-183.

脇本 竜太郎 (2009). 存在論的恐怖が自己卑下的帰属および他者からの支援的帰属の期待に及ぼす影響の検討 実験社会心理学研究, *49,* 58-71.

Weng, Z., Zhang, R., & Song, L. (2010), Terror management account of consumption behavior and group affiliation of people after catastrophe. 中国软科学, *1,* 181-192.

Weng, Z., Zhang, R., & Song, L. (2014), Terror management in China: the effect of difference mortality salience on the material possessiveness. 中国管理学年会市场营销分会场论文集

Wong, S. H. (2012). Does superstition help? A study of the role of superstitions and death beliefs on death anxiety amongst Chinese undergraduates in Hong Kong. *Omega, 65(1),* 55-70.

Xiao, Q., He. W., & Zhu, Y. (2017). Re-examing the relationship between mortality salience and prosocial behavior in Chinese context. *Death Studies, 41,* 251-255.

Xie, Q., & Yan, Y. (2016). The influence of mortality salience on moral judgment. *Social Science Theory, 33,* 142-144.

Yen, C. L. (2013). It is our destiny to die: The effects of mortality salience and culture-priming on fatalism and karma belief. *International Journal of Psychology, 48,* 818-828.

Yen, C. L., & Cheng, C. P. (2010). Terror management among Taiwanese: Worldview defense or resigning to fate? *Asian Journal of Social Psychology, 13,* 185-194.

Zhou, X., Liu, J., Chen, C., & Yu, Z. (2008). Do children transcend death? An examination of the terror management function of offspring. *Scandinavian Journal of Psychology, 49,* 413-418.

註

1) https://scholar.google.co.jp/

2) https://ci.nii.ac.jp/

3) http://www.cnki.net/

4) 本稿において、研究論文のキーワードを日本語・中国語・英語の三ヶ国語で設定し、検索を行った。中国語の場合、使用したキーワードは“死亡凸显(提醒)效应” or “恐惧管理理论”and“日本”or“中国”or“香

港”or“澳门”or“台湾”or“东亚”とし、英語の場合では、“mortality salience” or “Terror Management Theory” and “Japan” or “China” or “Hong Kong” or “Macao” or “Taiwan” or “East Asia”とした。

5) 死の顕現化操作(自由記述法)に用いられている設問は以下の通りとなる:1.自分が死ぬ時を想像すると、どのような気持ちになりますか。 2.あなたが死ぬ時には、身体的にはどのような状態になると思いますか

Mortality saliences research in East Asia:
A review and a look forward focusing on the research of Japan and China

Hui FA *(Graduate School of Human Sciences, Osaka University)*
Naoki KUGIHARA *(Graduate School of Human Sciences, Osaka University)*

According to Terror Management Theory, self-esteem and culture worldview serve as buffers against the anxiety of death. Previous research suggests that reminders of death (mortality salience) can increase one's behaviors which meet the standards of their own cultural world-views. However, the mortality salience effect is inconsistently reported in non-western countries, and therefore requires further investigation. Therefore, we reviewed the mortality salience researches in East Asia (mainly focused on Japan and China). The purpose of this review was to examine 1. the mortality salience manipulation used in East Asia; 2. whether self-esteem and culture worldview work effectively as anxiety buffers; 3. the buffer function of religion; 4. the common and different points of views of life and death among East Asia. Based on the results, we discussed the future prospect of mortality salience research.

Keywords: Terror Management Theory, mortality salience, cultural worldview, self-esteem, views of life and death